

感謝祭によせて

いつわたしが？

マタイ二五・三四〜四〇

一六二〇年十一月、信教の自由を求めてイギリスを逃れた人々がメイフラワー号でアメリカに上陸しました。すでに寒い冬は始まり、その季節だけで半数が命を失ったといえます。そんな彼らを助けたのが、アメリカの先住民の人々。家も冬の支度も満足にもたない移民たちに暖かい食べ物を与え、種を分かち、農作業も教えてあげました。過酷な冬を乗り越え、次の秋が巡って来た時には、目の前に豊かな実りが広がっていました。移民たちは想像もしなかった収穫の恵みを神に感謝し、先住の隣人たちを招いて共に喜び祝いました。収穫感謝祭（サンクスギビング）の始まりです。米国では現在もこの日を大切な祝日として

守り、各家庭では人種や民族を越えて多様な隣人を招き、共に食卓を囲む風習が残っています。



今年、感謝祭に思う福音書のみことば。

「はっきり言うておく。私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(四〇節)

わたしが飢えていたとき食べさせ、渇くとき飲ませ、旅のとき宿を貸し、裸のとき着せ、病気のと看舞い、牢にいたとき訪ねてくれたと、右側にいる人々を王は祝福します。しかし、王と今日が初対面の人々はこう言います。

「いつわたしが？」。

そのときの王の答えが先の言葉。小さくされた人々、弱くされた人々との日々のお出合いの中に神さまとの関わりが隠れているのです。

(二〇一六年十一月二〇日礼拝より、津田記す)